

Title	「現場力」ノオト (2013年・春)
Author(s)	西川, 勝; 池田, 光穂; 宮本, 友介; 山森, 裕毅; 岡野, 彩子; 中原, 京子; 上條, 美代子; 山本, 彩加
Citation	Communication-Design. 9 P.59-P.71
Issue Date	2013-08-30
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/25967">http://hdl.handle.net/11094/25967</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 「現場力」ノオト（2013年・春）

西川勝（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

池田光穂（大阪大学CSCD）

宮本友介（大阪大学CSCD/大阪大学大学院人間科学研究科）

山森裕毅（大阪大学CSCD、招へい研究員）

岡野彩子（大阪大学CSCD、招へい研究員）

中原京子（大阪大学言語文化研究科・博士後期課程）

上條美代子（看護師）

山本彩加（大阪大学経済学部・学部生）

### “Genba-Ryoku” Note (Spring 2013)

Masaru Nishikawa (Center for the Study of Communication-Design:CSCD, Osaka University)

Mitsuho Ikeda (CSCD, Osaka University)

Yusuke Miyamoto (CSCD/ Graduate school of Human sciences, Osaka University)

Ayako Okano (Visiting Researcher, CSCD, Osaka University)

Yuki Yamamori (Visiting Researcher, CSCD, Osaka University)

Kyoko Nakahara (Graduate School of Language and Culture, Osaka University)

Miyoko Kamijo (Nurse)

Ayaka Yamamoto (Undergraduate student, School of Economics, Osaka University)

現場力研究会は、医療やケア、教育、アートなど、さまざまな対人コミュニケーションが生じる現場の具体的な諸相に光をあて、現場で求められる知について、人類学、臨床哲学、心理学などを専門にするメンバーや、医療や看護、通訳や事務等々を担う実践家たちが、学際的観点から議論する団体です。

大阪大学CSCDの臨床部門の教員を中心に活動し、研究会の開催、研究成果の発表などを行っています。2006年4月12日の第1回研究会から始まり、2013年3月13日には第139回の研究会が開催されました。

#### キーワード

現場力、参加、経験

Genba-Ryoku (Empowerment Faculty and sensibility in practice), participants, experiences)

### まえがき

約8年間にわたる「現場力研究会」は、これまで『Communication-Design』に「『現場力』術語集」あるいは「『現場力』ノオト」として、研究会の参加者が考える現場力について発表してきた。その総数は64編になる。今回の11編を合算すると75編になる。研究会を始めた2006年には、誰も思いつかないほどの数の多さである。現場力というテーマを前にして、どこへ向かえば良いか見当のつかなかった私たちは、現場力について思いついた事柄を、その考察がたとえ不十分であっても備忘録、ノオトのつもりで書き継いできた。

平成24年度の現場力研究会は、これまでの文献中心の研究活動から学外でのフィールド調査に一步を踏み出した。これまでも学外の看護・介護現場などで働く実践者の報告を聴く機会はあった。しかし、研究会のメンバーがそろって学外のフィールドへ出かけていくのは釜ヶ崎探訪が最初である。ぼちぼちと共同研究の準備が整いつつある予感がする。研究会のメンバーが個人で署名の文章をノットにするだけの時期は、もう終わりに近づいた。現場力に関するテーマ群の広さは、これまでの活動で明らかにされている。今後は、研究会メンバーの共同研究的な活動をより強化していき、各人のノットを十分に生かす論考の世界を構築していきたい。

## 1. ためらいの現場力

「認知症の患者は・・・」「糖尿病の患者は・・・」などと、病名で患者のすべてを語ってしまう過ちに気づいていない医療者がいる。医療者の分を越えた人間評価だ。診断は診断でしかなく、その病名で呼ばれる人と医療者と呼ばれる自分という人間の関係の一部を担うに過ぎない。「初心忘るべからず」と言うが、初心は忘れてしまう。思い出すのではなく、もう一度、考え直さなければならない。病み傷ついた人と、自分が出会う意味を再発見しなければならない。臨床の現場で身につける力は、とんとん拍子に登り詰めていくものではなく、何度も何度も新しく始め直す努力の内に芽ばえてくるのだ。反省を自覚的に継続していくこと、常に自分の足下を確かめ直す慎重さが、臨床現場における誠実さにつながる。現在の社会で主流となりつつある計画性や効率性を重視する短距離競争のような医療現場では、再考に再考をくり返す人は後戻りしながらのぐずぐず者と嘲られるだろう。が、急いで患者の横を通り過ぎる医療者が見落とした大切な問題に対処できるのは、遅れてやって来たぐずぐず者なのだ。

もう言葉を失った認知症患者だと、看護師のほくが思い込んでいた寝たきりのおばあさんが「ありがとう」とつぶやくのを教えてくれたのは、高校を卒業したばかりのケアワーカーだった。自分の思い込みに眠りこけていたのだ。目を覚ましているために、必要なこと、それはドキドキするためらいの希望である。

最近も、一緒に勉強会をしている特別養護老人ホームのスタッフが、胃ろうの人に経口摂取の支援をした取り組みを知った。半年以上、訴えのなかった人から「なにか飲むものちょうだい」と言われたケアスタッフのためらいが、その後2年にわたる取り組みのきっかけになったのだ。自分たちの支援の分析をするうちに、当初は見えていなかった胃ろうの人自身の努力が明らかになっていく。新しい環境と新しい生き方になじむ努力を沈黙の内に続けていた認知症の人自身の生きる意欲が、「なにか飲むものちょうだい」という訴えになって、

周囲の人を動かしたのだという考察であった。ケアする側がためらってしまうような訴えこそ、相手が大きく変化する起点になる可能性を指摘していた。

現場は計画や計算が破綻する危険性と同時に、意図を越えた可能性を豊かに含みもつ。ためらう現場力による取り組みに、今後も注目していきたい。

（西川勝）

## 2. 「寄り添う」と現場力

今日、高齢者に対する介護福祉現場における行動理念のひとつに「寄り添う（acting close together）」ことの重要性が強調されている。とりわけコミュニケーションの取り難い認知症者との介護現場では「寄り添う」ということが重要視されている傾向がより強い。これが実践の場において指し示す具体的な内容は、相手の顔を見たり「自然なかたちで」触れたりしつつ、語りかけたり、相手の行動を促すように誘導することであり、通常のルーティンの行動のレパトリーに組み込まれるべきとされている。しかし、わざわざこの道徳的ニュアンスを含む「寄り添う」という表現を用いるのは、より理念的な徳目（アレテー）としたいという介助者の希望の表現でもあろう。ただし、介助者とのコミュニケーションがよく取れるように情報を収集するために「寄り添う」という意味でもないようだ。

これと似て非なるものが〈パーソン中心の介護〉概念である。トム・キットウッド（2005）は、コミュニケーションの取り難い認知症者を、従来の医学モデル——別名「標準パラダイム」——から観るのではなく、その代りに、その人らしさ（personhood）からみる新しいパラダイムのなかで、その人なりを承認（validation）することの重要性を説く。キットウッド（2005:119, 158-166）は、先に紹介した日本文化的ニュアンスたっぷりの「寄り添う」ことの意義などは一切眼中にはないようだ。むしろ認知症介護マッピング（DCM）という行動観察法を基調とする評価方法のなかで「前向きな働きかけ（positive person work）」を行うことと「質の高い認知症介護」との強い関連性を指摘しているからである。

私たちが関心をもつのは、この日本語の「寄り添う」ことが、日本文化の認知症介護における現場力とどのように関連しているのかという点にある。私の結論はこうである。「寄り添う」ことは、その人自身に対して現場力を陶冶するための前提になるが、そのこと自体が直接的に現場力になるのではない、と。なぜならキットウッドが言うように、DCMは評価自体に意味があるのではなく、現場にフィードバックされた時はじめて意味を持つからだ。私たちは「寄り添う」言葉のソフトイメージに満足することなく、その先にある、現場での行動が帰結するものと、それに関する経験知が事後的にどのように結びつくのか、今後より深く考える必要があるだろう。

## 文献

キットウッド、トム『認知症のパーソンセンタードケア』高橋誠一訳、筒井書房、2005年

(池田光穂)

# 3. 認知症者の世界へのマッピング

認知症介護の現場力の陶冶に「寄り添う」ことはケア開始時の前提にこそなれ、それ自体が現場力にはならない。キットウッドはDCM（認知症介護マッピング）という現場で観察されたものが、評価を経て、介護の実践者にフィードバックされることが重要であると指摘した。しかし今はそれとは異なる接近法を考えよう。つまり、認知症ケアの現場に評価をいち早く還元する手前に留まり続け、キットウッドがいう認知症者自身のその人らしさ（パーソンフード）に接近する認識論上の地図を、介助者と認知症者の共同作業で作成する方法（mapping）を提唱しよう。その作業こそが、介助者をして現場力を形成する手がかりになるという主張である。

CSCD臨床コミュニケーション関連科目「認知症コミュニケーション」のかつての受講生であり、実地調査を重ねている京極重智さんの最新の論考（2013）から、そのことを考える。彼は介護現場で「寄り添う」ことの重要性が声高に主張されているにも関わらず、その構造が理論的に十分に解明されていないのではないかという疑問をぶつける。アービング・ゴッフマンのドラマツルギー（dramaturgy）論に依拠しつつ、認知症高齢者と介助者は、それぞれの当事者が保持する劇場＝舞台があるのではないかと次に指摘する。たしかに私たちは、他者との相互作用を通して、自らの社会的役割を、この環境世界（*Umwelt*）という劇場の中で演じている。ゴッフマンの相互作用論では、それぞれの行為者が「状況の定義」をおこなっている社会空間が劇場＝舞台と説明される。現象学的社会学の知見では、誰もが「状況の定義」という操作をしているのだという自覚を持たない——それを「自然的態度」と言う。京極さんによると、認知症者と介助者の劇場＝舞台の間を架橋するのがアルフレッド・シュッツによる多元的現実論である。シュッツは、当事者がその世界の中でリアリティをもつことができるのは、何らかの「物質的誘因または物質的基盤」を手がかりとするからだと言う。

現場周辺にある手すりやテーブル、食器はその物質的誘因の最たるものだが、他者の身体もその延長に含まれよう。認知症者を介助者には理解不能であるという自然的態度で判断しないこと。当事者たちのしぐさや視線や音声など詳細に記述していくことを通して彼らの劇場＝舞台を観ようとする。これこそが私の主張したい、認知症者というパーソンフードに接近しつつ、その人と共同でつくる認識論上の地図作成＝マッピングに他ならないのである。

## 文献

京極重智 (2013) 「認知症高齢者の世界」に「寄り添う」ことへの一考察、『保健医療社会学論集』23 (2): 69-77.

(池田光穂)

# 4. 伽藍の知・バザールの知

月に一度、釜ヶ崎で「哲学の会」が開催されているが、著者はそこに参加して、おっちゃん達との生き活きとした議論に驚き、楽しんでいる。毎回、一つのテーマについて2時間程度、語り合う。互いに自己紹介するわけでもなく、経歴や肩書きも気にしない。何か一つの答えに収束する気配もない。本線がないから脱線が通常運行となる。議論というよりも雑談なのだが、しかしそこでは明らかに知的興奮が惹き起こされているのだ。まるで広場のバザールの喧騒のように。

ソフトウェア開発者のエリック・レイモンドは、ソフトウェア開発コミュニティにおける2つの開発方式を対比して「伽藍とバザール」と呼んだ。すなわち、伽藍方式とは少数のコアチームによる意思決定を尊重する中央集権的な手法であり、バザール方式とは多数の参加者の独自性を尊重する分権組織的な手法である。(あるいは「会議室と現場」の喩えでもよいかもしれない。) この対比は、「専門知」と「生活知」にも成り立つのではないだろうか。大学を中心とする学術機関は、まさに専門知に対する伽藍(権威)として機能している。一方で、市井に生きる人々の生活知は、多様な価値観の中で持ち寄られたバザールの知である。

ただし、ここで重要となるのは伽藍とバザールは対比されるものであっても対立するものではないという点だ。むしろ求められるものは「伽藍の知」と「バザールの知」の間にあるのではないだろうか。いかにして「伽藍とバザール」の融合を図るかが、われわれ(とりわけ「伽藍」の住民)にとっての大きな課題の一つである。そのための試みとして起こったのは、いわゆる哲学カフェ・サイエンスカフェ運動であった。だが、わが国でのサイエンスカフェは「伽藍の知」のアウトリーチ活動としての側面が強く、いわば「街角公開講座」となっているケースが多いという。「伽藍の知」は、必然的に伽藍の文脈(あるいは「スポンサーの御意向」)に縛られてしまうのだ。「坊主憎けりゃ袈裟までも」というが、袈裟を脱いでも坊主は坊主である。われわれにできることは伽藍の文脈を背負ったままバザールの文脈の中に飛び込むことであり、その可能性は釜ヶ崎のような小さな街あるのかもしれない。

## 文献

Raymond, E. (1999) The Cathedral and the Bazaar. 山形 浩生 (訳) (2000) 『伽藍とバザール』 (<http://www.catb.org/~esr/writings/cathedral-bazaar/cathedral-bazaar/>)

(宮本友介)

# 5. 現場に臨む記号論

ケアや看護の現象学の研究会に参加しているが、私自身は現象学者ではない。私がそこで考えていることは、記号論を現場に臨む仕方で練り上げていくことである。

記号論は評判のよくない学問である。現象学が生き生きとした生活場面を捉えるのに対して、記号論は人間性をそぎ落とした生硬な情報を扱うという印象を持たれている。「人々が生きている現場を記号や情報に変えてしまうなんて!」というように。

確かにそういった一面もあるだろう。だがそれがすべてではない。現場だからこそ意味があり、感じとることのできる記号がある。臨床に関わる症候や症候群がそうだが、他にも痕跡、予兆、シグナル、暗示、手がかり、嘘、言い淀み、表情などを挙げることができる。

例えば何か事件が起きたとする。残された荷物、残り香、何かしらの傷などは痕跡としてある人の不在を告げている。いったい何が起きたのか。残された物や証言からその出来事を再構成しようと手がかりを掴もうとする。痕跡に触発されて突然記憶が蘇るかもしれない。そういえばあの時あの人は一瞬言い淀み、あんな表情をして何事かを言った。それは嘘だった。あるいは暗示めいたことを話した。なぜそんなことを言ったのか、なぜそのように話したのか…。もしかすると救援のシグナルを発していたのかもしれない。しかしそれに気づくことができなかった…。

感傷的な例である。とはいえ「いったい何が起きたのか」を捉えることは現場に臨む記号論の重要な働きではないだろうか。これを仮に痕跡論と呼んでおこう。しかしまだある。それは「これから何が起きるのか」を捉える記号論である。これは予兆論と呼べる。最後に考えられるのは「いま何が起きているのか」を捉える記号論である。これをどう呼ぶかは難しいが、とりあえず症候を広い意味でとって症候論と呼んでおこう。

以上のことに付随して、現場でこれらの記号を読み取れるかどうか、つまり解読者としての力量が問われる。それは記号を読み解く修練によって可能になるだろう。

ここで構想した記号論の利点は、ケアの現象学研究会の事例研究で見られる「記述」の方法論の曖昧さに視点を与える点にある。また会話分析への偏重を問いに付し、分析を補助するアイデアも出せるだろう。さらに、記述を蓄積して構造を取り出すという現象学的営為に対して、現場での理解と動きに活かせるという利点があるとも考えている。

(山森裕毅)

## 6. カラクリ屋敷 — 心象風景、幻想あるいは幻覚（その1）

ある夏の日の夜ふけに、三日前に緊急入院したNさんからメールが届いた。タイトルには「カラクリ屋敷」とある。「ちょっと寝た間に美容院は貧民向きの病院へ変わりました。K病院は悪の巣窟？長い伝統が有るようです。深入りすると怖い結果になるかもですー」。ジョークか本気か。なぜだろう本気だと直感した。今日から本格的な胃腸の内視鏡検査に入ったはずである。何かあったのだろうか。

翌日Nさんを訪ねると、個室から集中治療室に移されていた。私がよく知るおっとりとしたNさんとはまるで違う。絶えず大きく見開いた目の中で、黒目がギョロギョロと落ち着きなく泳いでいる。ひどく脅え、興奮している。さながら去勢のために訳も分からぬまま連れて来られた野良猫が、おのれの生命を脅かすものを本能的に察知し、意識下に潜むあらん限りの生命エネルギーを奮い起こして闘っているようであった。ベッドの上で大暴れするNさんをナースが五人がかりで押え込んだ。

次の日の午後、今度はNさんの携帯から電話があった。「選挙の賄賂に弁当が配られている…なのに私には食事をくれない…写真館でパチパチ光が…乗物に載せられて連れて来られた…」。明らかに様子が変わる。検査の苦痛が大き過ぎたのだろうか。駆けつけると、途方にくれたNさんのご家族が「たった一晩でこんなことになることがあるもんなんですか」と、不安と疑念と非難が入り混じったような声で医師に問うていた。

電話での内容について尋ねてみると、Nさんはパッと目を輝かせて話し出した。そしてようやく私にも、意識朦朧とした中を救急搬送されたNさんが訳の分からぬまま横たわり、恐らくはその視界の範囲内で観察しえた断片的な情報から持ち前の豊かな想像力を大いに発揮させて想い見ていたであろう世界が、目に浮かんできた。入院時に入った洗面台付きの個室が「美容院」。レントゲン室が「写真館」。後に移動した集中治療室に隣接したナース・ステーション（Nさんの視点からは足しか見えていない）が「選挙事務所」。検査前の断食やひんぱんな担架による移動も辻褄があう。Nさんの目に映っていたのはまさに、瞬時に目まぐるしく場面が変わり、どんなトリックが仕掛けられているやも知れぬ、怪しげな「カラクリ屋敷」だったのである。「まあ、大冒険して来たのねえ！」と私が言うと、「そうよ、私ってかなりの冒険家よ」と、誇らしげな顔で愉快そうに笑った。

（岡野彩子）



## 7. ゾンビ — 心象風景、幻想あるいは幻覚 (その2)

Nさんの話を聞きながら、私は自分が入院した時のことを思い起していた。救急搬送されたNさんとは違い、私には心の準備をした上で入院を決める余裕があった。そのため「カラクリ屋敷」に「監禁」されて「殺されるかもしれない」といった恐怖を味わうほどではなかったが、それでも初めて目にする手術室の異様な光景というのは今でもよく覚えている。それは寒々とした暗くだだっ広い地下冷凍室のように見えた。そのことを後に看護師をしている友人に話してみると、首をかしげてはいたが。

そのような手術室の中には帽子とマスクで顔を覆った人々が立っていた。何人いるのか、誰が誰なのか、暗い上に眼鏡も外しているので皆目わからない。病室から付き添ってくれたナースが帰ってしまうと何だか心細くなった。だから手術台に仰向けになった私の目の前に「ぬっ」と何かが顔を出した瞬間は、心臓が止まりそうになった。だってあたかも墓から身を起こした「ゾンビ」のように見えたのだ。次の瞬間、「麻酔を担当するCです」と、独特のアクセントで中国人らしき医師が言った。私はさらに動揺した。なぜなら数日前、別の医師が麻酔担当者として挨拶に来たからだ。頭が混乱したまま眠りに落ちた。

後に説明してもらい謎は解けた。私の手術で担当した麻酔医は一人ではなく二人であった。そして本来は手術前に二人揃って患者の病室に挨拶に行く決まりだと言うから、何らかの事情で簡略化されてしまったようだ。些細なことのようにだが、手術に臨む患者の心が如何に繊細なものかを身を以て体験した今、こうしたマニュアルの存在にも大いに頷ける。

Nさんや私が体験した非現実的な光景は一般に「心象風景」、「幻想」あるいは「幻覚」といった言葉で呼ばれている。「幻」と聞くと儚げだが、ゾンビまで現れるあの一連の異様な風景は妙にリアルであった。元良勇次郎によると、心的活動において実在の標準は物質活動におけるそれとは異なり、幻覚もまた一種の実在と見なしうる(元良[1915]:51)。すると心の働きを以てすれば誰ひとりとして同じ世界を見ていないはずであり、まして入院患者の心の奥深くに潜む底知れぬ不安は、他の人には思いもよらぬ風景を見させているかも知れない。「なんで私あんなふうになったのかしら。でも今でもはっきり覚えているのよ」と、今ではすっかり心身の安定を取り戻したNさんが笑って言った。

### 文献

元良勇次郎 (1915) 『心理學概論』 丁未出版社/寶文館。

(岡野彩子)

# 8.

## 「現場力」再考

偶然とも必然とも思えるよく似た2つのコミュニケーション困難事例により、「現場力」について再考する。

ひとつは、他人を「敵対視」するがごとく、自らがクレーマーとなっていることを認識しつつも、他人のためにそうやっていると公言する人の事例で、仮にAさんとしておこう。コミュニケーションに困難さを来す障害をもたず、社会生活を当たり前を送る一般人である。おそらく仕事を離れると、コミュニケーションは十分にとれる人となろう事例である。どこの職場にも一人や二人はいるお局的な存在でもあるのだが、職場の人たちが一様にAさんとのコミュニケーションに頭を悩ませ、長い付き合いの上司でさえAさんに遠慮し、振り回されるといった状況である。

もうひとつの事例は、仕事に感情をいちいち込め過ぎる人、Bさんである。恋愛感情に疑似した感情を仕事に持ち込むために、しばしば思い込みによる嫉妬や被害者意識で、周りを悩ませていた。上司は、Bさんより年若く、社会経験がそれほど豊富ではなく、Bさんのような仕事熱心な者を問題視することはできないからということで、家で「大奥」のDVDを見て人間関係を学ぶ以外に為す術がなかった。

しかし、ある時、新しく赴任したベテランの人間関係に経験豊富な上司が、Bさんを冷静にさせるグループ分けと若干の配置換えを行い、見事に解決した。当然、職場の空気のがよくなった。新しい上司は、困難事例を解決するために異動されたわけではもちろんない。そういった意味では、この異動は偶然であるが、異動してきた上司が人間関係に経験が豊かであったために解決できたという意味では、必然といえるかもしれない。状況の転換点をあえてあげると、新しい上司の異動とBさんたちスタッフの移動ということになる。

人間関係の調整が自分からはできない人と、その人とのコミュニケーションの困難さを感じて半ばあきらめている周囲の人たち——。こういった構図は、おそらくどこの職場でもみられるのではないだろうか。しかし、この事例のように、グループ分けを慎重に行い、配置換えをするという差配を下せる、人間関係に経験豊富な、上司という立場の人が、いつでも偶然に現れるとは限らない。

転換点や、因果性（といえない場合も）、あるいは偶然性、恣意性は、現場力とどのように関わっているのだろう。現場力の本質を、別の角度から、ここで一度捉え直すことを試みたい。（続）

（中原京子）

# 9.

## 転換点や、因果性、あるいは偶然性、恣意性と「現場力」(承前)

仕事に恋愛感情に近い感情を込めるBさんの事例では、新しく赴任した上司が、Bさんと直接コミュニケーションを試みたわけでもなく、なだめるために食事に連れ出したり、懇々と論じたりすることもなく、きわめて物理的で身体的な解決をほどこした。このことで、誰も精神的に痛むことなく、感情的に過大な負担を強いられたわけでもない。

一方、Aさんの事例では、上司は時々、Aさんを食事に連れ出してなだめているし、1時間以上にも及ぶ議論にも親切に付き合っている。Aさんの信じる職場の是正論を穏やかな表情で傾聴している。そうして、そのような精神的・感情的労働の代償として、Aさんフォビアに罹っているかのような「お局恐怖症」を呈し、Aさんと同様の年恰好の人、Aさんと同様の言葉を発する人と、Aさんを重ね合わせてしまうことが度々起こる。また、Bさんの事例と異なり、Aさんの配置換えの期待ができない職場である。

この状況は、伝統のように粛々と保持されていたが、ある偶然によって部外者がこの職場に入るようになった。仮にCさんとしよう。Cさんは、今までの経験からみて理不尽さを感じ、Aさんの伝統的な仕事のやり方に、さりげなく異議を申し立てた。しかし、Aさんの習慣でありかつ気性に深く基づいたやり方であったために、Cさんの試みは逆鱗に触れるだけに終わった。以来、AさんにとってCさんは習慣を破る人でありかつ注意しなければならない人となり、一方、CさんにとってAさんは「難しい」人となった。Cさんはこれ以降異議を申し立てることなく、何事もなかったように仕事を続け、Aさんの思い込みを指摘するのは偶然にチャンスが回ってきた時だけにし、ワンポイントでリラックスして言える言葉で済ますことにした。

つまり、Cさんは必要以上の「感情労働」をしないことに決めたのである。この態度をCさんが粛々と続けているうちに、まことに転換点がはっきりとしないのだが、何がAさんにとってコミュニケーションに変化をもたらすジャスト・フィットな行動や言葉かは不明だが——AさんはCさんに一目置くようになってきた。自然と敬語を話すようになった。

「現場力」がきつい精神的労働や「感情労働」に代表される場合ばかりではなく、こんな恣意性、偶然性をも味方につけることにより、「因果を断つ力」になる事例もあるのではないだろうか。

(中原京子)

# 10. 「しんがりごっこ」をめざして

身長150cmに満たない小柄な私は子どもの頃から背の順に並ばされ、「大きい者に負けるな。その分努力するのは当たり前。ひとには分かつもの」と、何でも1番前で見て聞いて1番先に行くように教えられ、それが生活習慣となった。1番は価値が高く、一人で挑戦すること、早くすること、フィット感やオリジナルであることも周囲の期待に応えるのには大事だった。1番に出すこと、結果を示すこと、良い内容であること、見栄えが良いことなど、自分の可能な目標を掲げ「さまざまな1番」の達成感を味わっていた。

朝7時の電車に乗る。満員電車でクチャクチャになっても1両目である。「3両目なら空いているよ」と教えられても「1番志向看板」を降ろすのを躊躇う。なかなか難儀な生活習慣だ。努力に結果が付いてくるような恵まれた職場環境だったから、固定観念は強化され続け、仕事人間の私は40年間医療界を突っ走ってきた。

ある時、定年退職後に文学部の学生になった友人を文楽鑑賞「嬢景清八嶋日記」に誘った。学生は分相応にという、彼女の希望で渋々10列目の席から鑑賞する事になった。いつもの最前列ではなく前に人がいるので戸惑いイラつき、少し背伸びしながら肩越しに人形を追い舞台の展開を見守った。娘が遠ざかる小船の中から身を乗り出し「とと様どうぞお達者で」と手を合わず場面。幼い頃別れた父に一目会いたい、親孝行のために身売り金を届けにきた娘の深い念に気づき、盲目の（平家の侍大将）景清が空をつかみ血の涙を流す場面など。さまざまな思いが湧き起こりどよめきざわめき、劇場全体が呼吸し動いているようだった。人形遣い（人形）も太夫も三味線も私たち観客も息を殺し、人形の動きにつられ私たちの身体も動き、泣き笑いため息が漏れる。

今まで私は独り鑑賞が多く、人形遣いとの交流や自分自身との内面交流で充分満足していたが一方通行だったのかもしれないと感じた。幕開きをひたすら待って気持ちを高めたり、盛り上げたり咀嚼反芻したり、共にそして皆で楽しむ事を知らなかった。お人形たちは最後にも挨拶に立ち、階上の方も立見の方も満遍なく750人もの方々をもてなしてくれるのだった。私は多くの人と一緒に分かち合い、深く味わえた特別な「1番の経験」となった。

還暦を越えた今、梅棹先生の「フォロワーシップ」や鷺田先生の「しんがりの思想」に深く感じるものがある。遅まきながら「しんがりごっこ」をしたいものだ。

（上條美代子）

# 11. 大学生が考える現場力

「現場力」とは何であろうか？ 今改めて現役の学部生の視点から考えてみる。思い浮かぶのは、現場にて良い人間関係を築く力、それを保つ力、臨機応変に対応できる力、問題を解決できる力などが思いつく。これでは抽象的すぎて具体性に欠ける。私（山本）の実体験から、この研究会で論じられている「現場力」と符合する例を抽出してみよう。

小学校に四校も転校したほどの転勤族だった少女時代、転校するたびに新しい友達をつくる力は現場力であった。ゼミのプレゼン後、想定外の質問をくらった際に交わす力も現場力だ。後輩にはお勧めできないが、ヒッチハイク中なかなか車をつかまえられず凍える夜に、（拉致というリスクを抱えつつ）1台の車に乗せてもらう力も現場力かも知れない。これらに共通するのは、現場力とは「人と人との関わりの中で発揮される」力だという点にある。

デザインセンターのホームページに紹介されている「現場力研究会」には、「現場力」とは、さまざまな対人コミュニケーションが生じる現場にて求められる知だとある。だから、現場力は、先に述べたように「発揮される」力であると同時に、「求められる」力なのである。対人コミュニケーションが生じる場とは、自分以外の誰かと空間を共有している場である。自室でインターネットに接続しているものの、ワープロソフトを使って1人パソコンをカタカタ鳴らしている時、対人コミュニケーションは生じていないと言える。対人コミュニケーションが生じている際に本能的に意識せざるを得ないのは、目の前の他者の存在である。そして、第六感を含む感覚を動員しながら他者と自己を同時に感じ、他者の判断を忖度しつつ、唯それだけでなく自分自身をも発信することだと思う。私が他者に対して行っているように、他者もまた私に対して何らかの評価や価値判断を行っているのである。自分のできるのは、他者に対して「～しなければいけない、～できる、～したい」のバランスを考え、何かしらの行動に移すことである。

このように考えると「現場力」とは、池田（Online）が言うような難しい抽象的な概念ではなく、ふつうの大学生が常日頃行っている、ふつうの実践なのではないかという気がする。これまで、私（山本）はそれほど多く参加したことがなかった「現場力研究会」であるが、そこで議論されている内容もまた、非常に具体的な行動の紹介とその解釈をめぐる議論であったように思える。

私（山本）は「現場力」を求めて大学のキャンパスを彷徨して様々な授業を巡り研究会に辿りついた。そして、私が探している現場力はオンラインの書物にはなく、〈自分自身の実践そのもの〉の中に在ったことを発見した。ボンジュール！現場力！

## 文献

CSCD「現場力研究会」(<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/ver2/research/genbaryoku.php>)

池田光穂「現場力」(<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/060518genba.html>)

(山本彩加・池田光穂)